

日本の里山の変化と東南アジアの森林との関係性：線香を事例として The Relationship between the change of Satoyama in Japan and Forest in Southeast Asia: A Case Study of Incense Material

横山 智^{1*}

YOKOYAMA, Satoshi^{1*}

¹名古屋大学

¹Nagoya University

タブノキは、クスノキ科の常緑広葉樹で、日本を含め、東・東南アジアの照葉樹林帯に広く生育する。その葉と樹皮は、粘性が強く、かつ燃やしても香りがないため、この特徴を活かして、それを粉にした「タブ粉」が線香（匂い線香や蚊取り線香）の粘結剤として古くから利用されている。1960年代まで、九州では大量のタブノキが里山で採集され、それを水車で製粉していた。しかし、山村の生業構造の変化と高齢化の進展によって、タブノキを採集する人が激減した。そして1970年代から、東・東南アジアよりタブ粉が輸入されるようになった。現在、九州でタブ粉の製粉している工場は2軒しか存在しない。貿易統計では、毎年4~5千トンもタブ粉が輸入されている。現在は、海外の工場で生産されている線香も多いので、海外の製造で使われているタブ粉を加えれば、日本で消費される東・東南アジア産のタブ粉は相当な量になる。

「線香を焚くと東南アジアの森林を燃やしている」と思われるかもしれない。しかし、これを単純に森林減少という環境問題と結びつけるのは早急すぎる。タブノキ樹皮の主要な供給先である東南アジアのラオスでは、住民が林産物仲買人の指導を受けながら、水田脇などの使われていないわずかな土地にタブノキを植林して、樹皮の1/3だけを採取して木を枯らさないように工夫し、持続的に樹皮を採取していた。また、同じくラオスの違う地域では、アグロフォレストリー的な土地利用で、農作物と共にタブノキの植林を実施していた。それは、住民の現金収入源としても大きく貢献しているのである。

日本の線香は海外の木材を利用しているから、海外の森林減少を引き起こしているという考えに結びつけるのは間違っている。そもそも、日本の里山利用の減少が原因で、国産タブノキでのタブ粉生産ができなくなり、東南アジアからタブ粉を輸入するようになったのである。要するに、この問題は日本の里山利用を考え直すことの必要性を問うているのである。線香という意外なモノから、環境問題の複雑さが見えてくるのである。これを明らかにするには、資源に関わる自然・社会・経済・政治を総合的な視野から考える「リソース・チェーン」の解明が必要である。現地の人々の収入源としても機能しながら、森を維持し、そして日本の伝統的な線香を守るためにどのような研究をする必要があるのか考えなければならない。

キーワード: 森林資源, 里山, タブノキ, 線香, リソース・チェーン

Keywords: forest resource, Satoyama, Machilus spp., incense stick, resource chain